

自己評価報告書(最終報告)

報告者

芸術系コース(音楽)／頃安
利秀

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

平成25年度科学研究費助成事業に「教員を目指す学生の「声」を育てる授業の開発」として応募したところ採択された。この研究の目的は、まさに将来、教師を目指す学生に対して、自分の専門分野としてどのような授業実践を展開すればよいか、ということにある。

①授業内容: 学生が教壇に立ったとき、子どもに語りかける直接的な手段である「声」が子どもに届かなければ、どんなに立派な授業内容であっても、その効果を上げることは難しい。授業の中で子どもとつながる直接的な手段である学生の「声」を育てていく内容の授業にする。

②授業方法: 専門分野の音楽の授業においては、声とからだとのつながり、また声と息との関係を理解し、実際に自分のからだを通して子どもに届く声が理解でき、実践できるような仕組みにしていく。

③成績評価: 適宜録音や録画を通して、自分の声とからだがどのような状態であるかを自ら把握し省察する。それを基に、どれだけ授業を受ける中で自分の「声」を改善できたかを評価していく。

2. 点検・評価

①授業内容については、教師として教壇に立った時に必要とされる声の育成を主眼に置いたものとした。音楽の授業であっても、ただ歌うためだけでなく、教師として授業の中で話すための声を育てることをおこなった。

②授業方法としては、声とからだ、また息との関係を理解することから始め、つぎに実際にからだを動かし、からだと声が一体になるような方法で発声を学び、それから歌に、また朗読につなげるようにして授業を行った。また録音・録画をできるだけ利用して、自分自身の声や演奏を客観的に観察できるように工夫した。

③成績評価については、各学生がどれくらい努力しステップアップできたかを成績に反映できるようにした。

全体的には教員としての資質向上のための授業ができたものと考えている。成績評価については、今後も検討を重ね、学生の意欲をさらに向上させるような方法を考えていければと考えている。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

教育支援に関する目標は、1の目標でものべたとおり、学生が自らの学習状況を省察し、それを改善していけるようなプログラムで授業を進めていくことである。そのために、次のことを計画する。

- ①授業において、学生が自らの演奏や表現活動を客観的に観察できるような工夫を考える。
- ②学生同士でお互いの演奏を聴いて、意見交換や相互批評ができるような授業にしていく。

学生生活支援に関する目標は、必要に応じて指導する学生と個々に話をする機会を設け、学生が自らがそれぞれの目標に向かって進むことができるように支援する。できるだけ学生の自主性を尊重し、必要以上に口出しはしない。

顧問を務める合唱団タドポールに関しては、演奏に関わる技術的な指導とともに、合唱団の運営についても助言していく。

2. 点検・評価

①②授業における教育支援は、Ⅱ－1でも述べたように、授業の中で学生自ら、またお互いに表現活動を観察し合い、意見が述べられる工夫を行った。

学生生活支援に関しては、問題を抱える学生に対して、個人的な範囲をこえる場合は、コース全体の問題として取り上げ、問題解決を考えていった。

顧問を務める合唱団タドポールに関しては、大学祭での演奏の指導や、3月に行った定期演奏会での指導と指揮を行った。

Ⅱ－2. 研究

1. 目標・計画

研究においては、これまで行ってきたドイツ・バロック期及びドイツ・ロマン派の声楽曲の実践的研究をさらに進める。またこれまで取り組む機会の少なかったイタリアの声楽曲や日本歌曲の演奏にも力を注ぐ。また平成25年度の科学研究費助成事業に係る「教員を目指す学生の「声」を育てる授業の開発」に取り組み、現行の授業に反映させていきたい。

2. 点検・評価

研究活動では、J. S. バッハのヨハネ受難曲及びカンタータの演奏会を伊丹市と神戸市で、また広島市ではヘンデルのメサイヤの独唱者として演奏を行った。また歌曲の面では、イタリアの作曲家ヴェルディの歌曲や日本の歌曲による演奏会も行った。徳島県三好市の合唱団の演奏会には指揮者として出演し、ヘンデルのメサイヤ(抜粋)、日本の歌、ベートーヴェンの第九交響曲の「合唱」の演奏を行った。

平成25年度の科学研究費助成事業に応募し、「教員を目指す学生の「声」を育てる授業の開発」という研究課題名で基盤研究(C)の採択された。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

各種委員会委員として、大学の将来を見据えたヴィジョンを持って、任命された委員会の運営において必要な役割を果たしていく。
また「エコアクション21」に積極的に参加し、自然資源の無駄遣いをできるだけしないようにする。

2. 点検・評価

大学院教務委員会委員及び人権教育委員会委員として、必要な役割を果たしている。
「エコアクション21」には、積極的に参加し、自然資源の無駄遣いをしないように努力している。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

公開講座の開催、教育支援講師・アドバイザー等派遣事業や地域における文化事業に積極的に参加する。
①公開講座「楽しい歌唱教室」を通して、現職教員への声楽実技指導、また地域社会の音楽文化の発展に貢献する。
②NPO法人鳴門第九を歌う会の理事及び合唱指導者として、地域社会の音楽文化の発展に貢献する。
③演奏会や講演会等を通じて、地域社会の音楽文化の促進に貢献する。

2. 点検・評価

①公開講座「楽しい歌唱教室」と、平成25年度教員免許状更新講習の講師として、地域社会の方々や現職教員への声楽実技指導と理論講習を行った。
②NPO法人鳴門第九を歌う会の理事及び合唱指導者として、第32回鳴門第九演奏会(6月)の開催に尽力した。
③7月に『七タコンサート』を開催し、鳴門市の音楽文化に尽力した。
④新しく始まった鳴門市の「なると第九」ブランド化プロジェクト推進協議会の委員として、教育部会の副部長を務めることになった。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

現在進行中の文部科学省の特別経費(プロジェクト分)による、「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」では、教科内容学研究協議会委員として加わり、小学校教科専門科目のテキスト作成に尽力した。